信毎歌壇

小島 なお選

「幻聴を友と思えばいいよね」と「FMスノー」
（長野市）森 ふうか

開局記念日
野焼きする煙の行方辿っては見える自分はいつも未熟で
（茅野市）三好 碧

俺の部屋一度も掃除しないのにそこそこ綺麗と蕎麦啜る音
（佐久穂町）太田 春子

白菜は寒風の畑に括られてただ無言なり仏像に似て
（岡谷市）吉池富貴勇

風の向こうに風の来て忘れぬ味を忘れぬままに菜を漬ける
（坂城町）春日 武

懐古園の隣りに住みし日のはるか藤村、草笛、紅葉の日々
（長野市）丸山 祐司

通話切る赤いボタンが爆発のボタンに見えて押せないだけだ
（熊本市）夏風かをる

休み時間小学校の校庭はその熱量で二、三度上がる
（松本市）中村 博穂

色形良き美味りんごを鳥は食む吾は嘆き夫は「鳥も生きてる」と
（須坂市）北沢かず子

顔面麻痺の顔でも通す顔認証ミスではなくてきっと手加減
（飯田市）萩原 英文

佳作

来春の味噌に成りたる豆叩きリズムをつけて歌も交えて
（下條村）福嶋田鶴子

忍ぶれど声に出にけり冬風邪はマスク厚めに喉飴に手話
（長野市）中牧いわ子

選評 第一首、地元のラジオ局だろうか。リスナーの悩み相談への優しくしなやかなアドバイスが心地いい。第二首、消えてゆく煙のかなたには、遠く自分の心がつながっている。いつかの芽吹きを期待して。第三首、のんきな電話の向こうは息子か孫か。掃除事情が気になる年末の気配。第四首、豊かに実った冬の白菜は寒さにじっと耐えている。白くまろやかなその姿を見つめる敬虔なまなざし。

米川 千嘉子 選

ああ母よまぬけな昆布をどりする人の話をもう一度せよ
（塩尻市）藤森 円

妻の異変は十年前の今朝の五時茶の花今年もさみしく咲けり
（長野市）せきたつお

寒い雨の日誰にも文句言われない自由 スチャダラパーを聴きおり
（飯綱町）小林 紀子

三人の子らの三人戦死して出家した友笑みて旅立つ
（木曽町）新村 亮三

秋の日にハープを聴かんと各地から盲導犬と集まる仲間
（東御市）広沢里枝子

児の抱くプードルあまりの可愛さに電池の入り口どこと尋ねる
（小布施町）市村 憲彦

豊作の柿配りたるおばあちゃん待って馴染みの収集車にも
（安曇野市）清水 公枝

一族のルーツを尋ね山梨へ柳澤寺跡石碑は語る
（御代田町）柳沢 光雄

スイッチを入れると同時に灯るなりためらうことなしLEDは
（松本市）堀内 悠子

「姉ちゃんでさえ受かったのだから」妹は落ち着き行けり高齢教習へ
（上田市）小林さよ子

佳作

孫の手がいつもの場所に無いことで爺・婆もめて口もきかぬ日
（佐久市）小泉 英介

毎年の庭の手入れに来し兄の九十歳の脚立は怖し
（辰野町）矢島あさ子

選評 第一首、昆布みたいに踊る人の話ももうできない母。ユーモラスだった場面がかえって悲しい。第二首、「妻の異変」に驚いた日のことも見ていた茶の花。その静けさが切ない。第三首、スチャダラパーはヒップホップのグループ。それを知らなくてもグループ名に漂う自由な感じが活きている。第四首、三人子の戦死の衝撃で出家した友。その気持ちを知る作者には笑っているように見えたのだ。

小池 光 選

大叔父と祖父のはなしを六歳児二時間椅子に耐えて聞きおり
（長野市）せきたつお

伊那谷の冬の夕日は四時に暮れ南アルプス残照冴ゆる
（箕輪町）向山 政俊

教科書を開くお城の石の上十五歳の日々を恋ひしく思ふ
（小海町）依田 久代

鬱々とする世の中に読み返す金子みすゞの詩は胸に沁む
（飯山市）小野沢竹次

かすかなる獣の匂いパドックに磨きぬかれし馬あらわるる
（長野市）原田りえ子

二度征きて二度還り来し人も有り長兄は二度目に征きて還らず
（小諸市）篠原 昭枝

ファインダー覗けば白き鹿島槍かつて登頂諦めし山
（長野市）松本 博人

茶の花のうすき黄色に霜降りてまためぐり来し十二月八日
（千曲市）上原 博司

冬の夜カノンを聞いて一人居の老いはしみじみ過去を思いぬ
（松川村）岡 豊村

病室の窓よりはるかふる里の明りが一つ点り初める
（長和町）羽毛田 栄

佳作

「私まだおなかにいたの」戦死せし父もつ友は静かに語りき
（駒ケ根市）塩沢 春子

子育ての始まりし頃手編みした小さき帽子は孫の頭上に
（諏訪市）小林さよ子

選評 第一首、思わず笑ってしまった。よく二時間も我慢した。六歳児えらい。しかし、その話、意外とおもしろかったのかもしれない。第二首、オーソドックスな叙景歌だが立派な歌。南アルプスの残照、いかばかりかと思う。第三首、昔むかしの思い出だが印象深くてあざやかに覚えているのである。お城の石の上の教科書、というところがいい。第四首、夭折した天才詩人。あるときの胸に迫るのである。